

リスト:《ローエングリンより》より「ローエングリンのエルザへの非難」

ワーグナーと同世代で、その音楽を擁護したのが、元祖ヴィルトゥオーゾ・ピアニストで作曲家としても活躍したリストであった。リストはワイマールの宮廷楽長だった 1850 年、ワーグナーの歌劇《ローエングリン》を初演。その数年後、ワーグナー・オペラを広めるため、自身のレパートリー拡大のために《ローエングリン》を題材とした小品を書いたが、その一つが「ローエングリンのエルザへの非難」である。オペラの第 3 幕、結婚式のあと、名前を尋ねないという約束を破らんとするエルザに対し、ローエングリンが優しくも熱烈な愛の言葉で諭そうとするアリアが巧みに編曲されている。

ショーソン: 詩曲

ショーソンはフランス的な色彩美とドイツ風の官能性が融合したような作風を特徴とする。ベルギーの名ヴァイオリニスト、イザイのために 1896 年に書かれた「詩曲」は、ショーソンの作品の中でも最も有名なものだろう。滔々と流れる音楽に煌めく、艶やかで神秘的な響きが魅力的。

シューマンの作品

「アラベスク」は「アラビア風の」という意味で、いわゆる唐草模様のこと。その模様がシューマンの創作意欲をかき立てたのだろう、一定のリズムで織物をおるような詩情あふれる作品に仕上がっている。

シューマンが 1838 年に作曲した《子どもの情景》は、子どものために書かれた曲集とはいえ、高い芸術性を誇る。その第 7 曲「トロイメライ」は単独でもよく演奏される作品。「トロイメライ」とは、ドイツ語で「夢見ること」という意味。

《ミルテの花》(1840) は、結婚式の前夜、シューマンがクララに捧げた歌曲集(全 26 曲)。「献呈」はその第 1 曲で、最愛の人に贈る至福の言葉が奏でられる。

シャブリエの作品

ピアノを得意としたシャブリエの代表作の一つが《10 の絵画的小品》。表題の通り、各曲が絵画のような楽想を持っている。本日は、巻き起こる風が見えるような「つむじ風」と、田舎の結婚式を想わせる、活気に満ちた「スケルツォ・ヴァルス」を取り上げる。

シャブリエの名を一躍知らしめた狂詩曲《スペイン》は、南仏・オーヴェルニュ地方出身のシャブリエの気質に、マネ、モネ、セザンヌら画家との交友が加味されたような、光と色が乱舞する、非常に愉快的な作品。本来はオーケストラ曲だが、今回は作曲者自身が編曲したピアノ独奏版でお届けする。

フォーレの作品

「ドリー」とは、フォーレと親しかったエンマ・バルダックの娘エレーヌの愛称。彼女の誕生日に毎年 1 曲ずつ作曲し、計 6 作をまとめたのが《ドリー組曲》である。その第 1

曲が 1893 年、1 歳になったドリーのために書かれた「子守歌」で、やさしいメロディを 3 +3 拍子でふんわり揺れる分散和音が支えている。

「ロマンス」は 1877 年の作。6 分ほどの小曲だが、シンプルなメロディに華麗な装飾が施されながら徐々に高揚していく。

フォーレはパリ音楽院院長も務めたフランスの作曲家。「夢のあとに」は、歌唱以外にも様々な楽器によって奏される、フォーレ作品の中でも特に有名な 1 曲。女性との幻想的な夢が醒めたあとの、男の哀惜が切々と歌われる。

J.ラフ:《ワーグナーの歌劇の主題による二重奏曲》より「ローエングリン」

ヨアヒム・ラフはスイス生まれのピアニスト兼作曲家。ワイマールでリストの助手を務め、師と同様にワーグナー・オペラを用いた楽曲を残した。この「ローエングリン」は、第 3 幕前奏曲のあとに出てくる有名な「婚礼の合唱」のテーマを変奏・展開した佳曲である。